

廃墟渡りの エルシエル

文：ソテイス 絵：えもん



星空の旅人



廃墟渡りの エルシエル

過去を視る少女と命宿す人形は廃墟を渡る
二人は、導^{しるべ}無く、寄^{よるべ}る辺無く、廃墟を巡る
その先は、腐敗か、虚無か、もしくは終焉か
いずれにせよ彼女達は旅をするのだろう
元より居るべき場所などないのだから
少女は全てを失い、人形は虚に愛を求めた

エルシエル

意思が感じられない瞳の
ぼろきれのような服をきた
人間の少女

過去を視る力を宿した魔法使い



リタ

漆黒のドレスを纏った
不気味な人形の少女
エルシエルを愛している

愛を愛する生き人形



目次

6 第一章 はめつ いざな はくよく 破滅を誘う白翼

74 第二章 ひとりぼっちのエルシエル

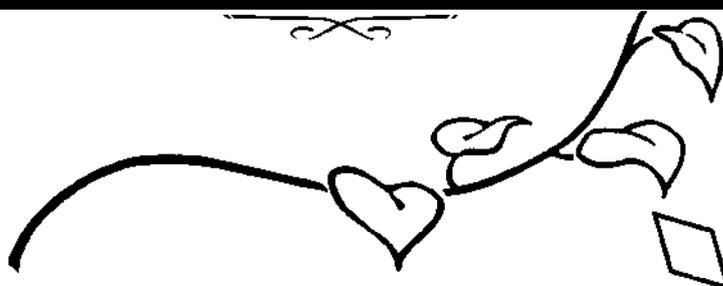
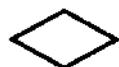
180 第三章 ほうこく かいな 亡国の腕

306 第四章 くうそ かめん 空疎の仮面



第一章

はめつ いざな はくよく
破滅を誘う白翼



少女が二人、深緑に満ち溢れた道なき道を進んでいた。

そこは深い、深い森。

近くの出身者でも立ち入らないそこを、草をかき分け、枝を払い、二人はただただ進む。

時折顔に触れる蔓やら立ち込める草の匂いに辟易へきえきしたような素振り見せるが、ここしか道が無いらしかった。

——いや、彼女達に元より道など無いのだから。

道とは何かを成す為の導しるべである、使命持たぬ者には見える訳がなく、そもそも必要無い。

二人の内、先頭に行く少女の名はエルシエル。汚れてくすんだ青い髪に、暖かさの感じられない緑目、大きき
の合わないくすんだ服に、ぼろきれのようなブランケットを背負っている。

まるで人生に疲れた浮浪者ふろうしやのような出で立ちだが、年齢は驚くほど幼い。目測で十から十二といったところだ
ろう。

その後ろを追従するのは綺麗な黒髪を湛たえた赤目の少女、名をリタと言う。

フリルがふんだんにあしらわれたその衣装は一目で高価だとわかる上質な物だ、そこら辺の貴族が召している

ようなドレスにも見劣りしないだろう。

そのような衣装で深い森に立ち入っている事に奇妙な印象を受けると共に、それに混じって何処か恐ろしげな雰囲気を感じられる。

それは彼女の血の気を感じられない肌のせいもあるのだろう、その肌は陶磁器とうじきの様に真っ白で穢れけがの一つも感じさせないのだ、美しいを通り越して不気味ですらある。

ぼろぼろの少女に、豪華な服を纏った少女、極めてちぐはぐな二人組だった。

「エル、ここ以外に通れる道は無かったの？ 植物の汁が私の服を汚しそうで嫌なのだけだ」

後ろを歩くリタが嫌そうに呟く、彼女の服装は上物だから気を使うのだろう。

「わからない、通れそうだから通った」

「はあ、エルに先導してもらったのは間違いだったわね。靴も汚れてしまったし……せめて袖だけでもまくっておこうかしら」

リタは自らのドレスの袖口を掴み、二の腕の辺りまで引き上げて結ぶ。

特筆すべきところはない至って普通の動作、しかし露になった腕は奇妙極まりない。

雪のように美しき肌のその継ぎ目、人間で言えば肘や腕に当たる部分に明らかに異質な物があつたのだ。

その物体は丸い何かで、リタの腕の動作に合わせて滑らかに稼働している。

それは、人の世では球体関節と呼ばれる物。人形に使われるそれであつた。

そう、彼女は人形なのだ。

「けれど。早くここから出たいわね」

「……あ、でられそう」

彼女達は間もなくまともな道に出る事が出来た、足元に広がるのは土の色。苔むしていない地面だ。

「ああ、この感触よ。この感触は私の靴を汚さないから好きよ。さっきみたいなくずぐずの地面は泥だらけになつてしまつから嫌いだわ」

見ればリタの高価そうな靴は茶色に染まりどろどろになっている。

こうなつては幾ら美しくともその価値を發揮しないだろう。

「エル、後で洗ってくれないかしら？」

「わかった」

「ありがとう。愛してる人に世話を焼いて貰えるなんて、幸せね」

再び二人は歩き出す、道の性質が変われど彼女達の行動は全く変わらない。

夢も無く、目的もなく、生命をただ漫然と存続させるために歩くだけだ。

そんな道行の前方から、規則的な音が微かに届く。

馬の蹄ひづめと、木製の何かが軋こもむ音。馬車であることは間違いないだろう。

「商人かしら、だとしたらここで会えたのは幸運だわ。エル、追いかけるわよ」

リタは傍らを歩くエルシエルの手を取り、商人の馬車に追いつこうと少し歩を速める。

追い付けるかは賭けであったが、幸いな事に馬車は文字通り道草を食べながら移動していたようで、そうかか
らない内に馬車の幌ぼろを認める。

「その馬車の方かた、ちよっといいかしら」

矮躯わいくを震わせ声を張り上げるリタ。

声に反応して手綱が揺れると、馬は止められたことを不満そうに嘶いなないた。

リタはエルシエルに自分の後ろに下がるように指示してから、馬車へと近づく。

彼女達の旅はまだ始まってから日が浅いが、見知らぬ相手との会話はリタが担当するという慣例が既にできていた。

欺瞞ぎまんを働くような輩であつた場合はリタの方が上手くいなせる事に加え、温厚な人間が相手にしても彼女の方が好感を得られやすいからだつた。

リタは人形ではあるが、エルシエルよりよっぽど口が達者で感情豊かなのだ。

「ごきげんよう御者さん、少し道を教えていただけませんか？」

突然現れた二人の少女に怪訝けげんな表情をする御者の男、当然であろう、何処の国からも遠いこの場所で声をかけて来たのが年端もいかぬ少女だつたのだ。

旅人らしい格好をしているならまだしも、格好もそうは見えない。

御者の男が首を捻っていると「あらあら」という声と共に女が顔を出す。彼の妻であろうか、どうやらもう一人乗っていたようだ。

やはり女も首を捻ると、一旦顔を引っ込め、少し間を置いて馬車から降りてきた。どう対応したものか相談していたのだろう。

降りてきた男は子供をあやすように笑いかける。

「こんにちは、お嬢さんたち。こんな所でどうしたのかい？ 迷子なら送って行こうか？」

「それには及ばないわ、道を教えて頂けたら事足りるもの」

柔らかく遠慮の意を表明するリタ、しかし女は子供の戯言とばかりにまともに取り合わず、続けざまに言葉を重ねる。

「そうよ、商品を降ろしたばかりで荷台は開いているから乗っていくといいわ」

「ええと……」

押しの強さに困り果て、リタは閉口してしまふ。

子供を放っておけないのは性別のさかなのか、女は「ほら、手をだして」と言ってリタと、その背後に佇むエルシエルへと手を伸ばす。

その刹那。

「触らないでっ！」

伸びてきた腕にエルシエルは体をこわばらせたかと思えば、叫びをあげて後ろに飛びすぎる。

女が手を伸ばしたのは迎え入れる意思表示でしかなく、そういう意図は無かったのだが体を触られると錯覚してしまったのだ。

女は驚き手を引っ込める。エルシエルにとっては反射的な行動なのだが、呆然とする女を見て罪悪感に駆られたのか、エルシエルは謝罪を口にする。

「……ごめんなさい。でも、触らないで」

「い、いえ。こっちこそごめんなさいね……」

妙に距離の離れている女とエルシエル。置いてけぼりになって立ち尽くす男。

リタは微妙な空気を払うように咳払いをして、話を戻す。

「さて、道を教えていただけませんかしら」

男は腕を組んで眉間に皺しわをよせると、小さく唸った。

「それは構わないが……お嬢ちゃん達、家出とか迷子じゃないのかい？」

「そういう類の状況ではないわ、少し事情があつて旅をしているの」

男と似たような表情を浮かべる女性、信じるに信じられないのだろう。

「それ……本当なの……？」

「こればかりは証明できないのだけれど、本当よ」

男は難し気な表情で、逡巡しゅんじゆんを重ねた末、諦めたように首肯した。

「……その言葉信じるよ。まあ迷子にしては落ち着きすぎてるしね」

「ありがとう、助かるわ」

「それで、道を知りたいって、何処か国にも行くのかい？ 大河の国とか本棚の国あたりかな？ あ、それと

も、少し遠いけれど海の国かな？ あそこ等辺はまだ戦争とは無縁だもんね」

「海の国……行ってみたいわね。あそこは善き人ばかりで料理も美味しい良い国だって聞いたことがあるわ」

リタは背後のエルシエルを一瞥して、寂しげな表情を浮かべた。

「けど、そうね、そこは私達の立ち入っていない場所では無いの。……廃墟はないかしら？ それも比較的近年に廃墟化したような場所がいいわ」

「廃墟……？ 廃墟ならここから北に行けばあるけど……」

意図が読めず男は歯切れ悪い言葉を返すが、リタは気にも止めず続きを促す。

「成程、そこは簡単に行けるのかしら？」

「うーん……少し地形が複雑で迷ってしまうかもしれないね。行きたいのであれば、地図を描いてあげようか？」

「ええ、是非お願いするわ」

男は頷くと馬車の幌に乗り込み、白紙の紙切れと杖を持って降りて来る。

彼が紙切れに向かって杖を振ると、そこから発された青い光が紙切れを包む。やがて光が塵ちりとなって消えると、

白紙だった善の紙切れに地図が浮かび上がっていた。

それは魔法の力、世界にはこのような力を行使できる魔法使いと呼ばれる存在がいる。

彼らは魔法という計算式を以て大気に含まれる魔力に干渉し、現実を書き換える技を持つ。

魔法使いであれば、白紙に地図を描き込むことも、瞬時に水を凍らせることも、人を呪う事も、空を飛ぶことだってできるのだ。

「ありがとう。助かるわ。じゃあ私達はこれで」

リタは地図を受け取ると一礼し、エルシエルの手を引いて歩き出す。

疑問を滲ませた御者の声が、その背中を引き止める。

「お二人さん、廃墟に行つてどうするつもりなんだ？ ならず者が住み着いているかもしれないから危険だよ！」

最も言葉、いたいけな少女が二人だけで廃墟を目指すなど不可解極まりないだろう。

御者の疑問に振り返ったのはリタではなくエルシエルだった。

「良いの、わたしがいいのは廃墟あそこだけだから」

寂しそうでありながら、その実その意味を既に失った空っぽの表情で笑った後、不思議な言葉を重ねた。

「それに悪い人がいたとしても、どうせみんな死んじゃうから」

彼女たちの行動が如何に不思議なものであったとしても、それがエルシエルにとっても他人にとっても最善の選択なのだ。

それからしばらく時間が経ち、日が真上に昇った頃。

奇妙な二人組は男から貰った地図に従い、目的の場所へたどり着いた。

そこに立ち並ぶのは文明の残り香を漂わせながらも確実に自然に侵食されている建物群、奥には大きな建造物や誰かを象った石像などが見えるが、それらが語るのは栄華ではなく虚しさだ。

そこはまごころとなき廃墟であった、建物の劣化具合から推察するに完全に無人になったのはここ三十年くら

いの出来事であろう。

「きっとここね、あの商人が言っていた場所は」

何かしらの反応をするべく口を開くエルシエル、しかし喉を震わせる前に、ぐーというお腹の音が鳴った。

「あらあら、可愛らしい返事なこと」

エルシエルの可愛らしい反応にくすくすと笑うリタ、エルシエルは恥ずかしがるわけでもなく平然と歩きます。

「ごはん、あるといいね」

歩きだした彼女の後ろについて行くように、少し慌てた歩調でリタは続く。

「無ければ行き倒れたわ」

「それもいいけど」

「それは困るわ、あなたが居なくちゃ誰が私を愛してくれるというの」

奇妙な二人は奇妙な会話を続けながら廃墟を歩んで行く。

本来であればもっと警戒して然るべきだ、時に廃墟というのは栄えている国より危険なものなのだから。

住み着くならず者、危険な生物、建物の倒壊とうかい、ざつと羅列られつしただけでも危険が目白押しなのである。

そう言った要因で手慣れた旅人であっても慎重に警戒するようなそこを、二人は躊躇なく闊歩かっぱする。

周囲の音に耳を澄ませる事も無く、建物に住み着く生物になど目もくれず、歪んで潰れかかっている建物の間隙かんげきを平然と進む。

喪失そうしつの痛みを知っていれば失うのを恐れるであろうが、最初から得られなかった者は失う痛みを知らず、やがて自分の命にすら執着しなくなってしまうものなのだ。

そんな危険な道のをりを行くのは命を繋ぐ食料を手に入れるため。

生きていたところでその先に何かあるという訳では無いのだが、とはいえお腹は減ってしまうものだ。

二人は色々な手段で建物に侵入し、食料を探した。

開きかかっているドアから、はたまた割れた窓から、時には倒壊部分から建物に侵入して食べられる食料を探した。

結果から言ってしまうえば見つからなかった、よしんばあったとしても既に別の何かと化しているか、おおよそ

食べられた物ではない匂いを発していた。

「無いわね」

腐った瓶詰を放り投げ、リタは言った。

「無いね」

かびたパンを口元に運び、しかし直前で捨てたエルシエルが言った。

流石に嫌な臭いがしたのだろう、少し眉根が寄っている。

「お腹すいた」

かびた物とはいえ食べ物を目にしてみましたからだろうか、エルシエルのお腹の音が一段と大きく自己主張した。

「二日も食べて無いものね、流石にそろそろ限界よね。もういつそのこと森で木の実でも探した方が早いかもしれないわ」

周囲はあらかた探索してしまっており、食料が得られる可能性を見出せる目ぼしい建物は既になかった。

溜息をついたリタは、エルシエルへと振り返った所で言葉を止めた。

「エル……」

エルシエルは何もない虚空を、しかし明らかに何かを見つめていた。

その瞳の有り様は明らかに現在を見つめておらず、常人には視る事の出来ない何かを見通していた。

「あそこ、何かの食べ物があるかも」

彼女が指さしたのは無骨な建物。街中であって明らかに異様な雰囲気を放つそれは、家屋とは比べ物にならない程の巨大な塀に囲まれていた。

塀の上には侵入を阻む槍上の金具が備え付けられており、高さと合わせて超えるのは容易では無いが、幸いな事に門の蝶番は壊れて開ききつている。

エルシエルはそれだけ言うと、心ここにあらずという様相のまま建物に歩き出す。

「エル、視たのね」

リタは納得したように小さく頷くと、その背を追った。

エルシエルはどんどんと建物の奥へと進んで行く、初めて来たにも関わらずその足取りは勝手知ったるものだ。そして辿り着いたのは厨房の様な場所、エルシエルはその隅に置かれていた木箱を迷わず開ける。

中に入っていたのは金属製の丸型の缶、側面には食品の絵が描かれている。

ここ百年くらいで開発された缶詰という食べ物だった。

「なるほど、缶詰……確かにこれなら食べられるかもしれないわ」

缶詰であれば食べられるかもしれない。あくまで理詰美的にはだが、缶詰は開封されていなければ永久保存が可能だ。

一方エルシエルは、それを意気揚々と取り出した本人でありながら缶詰を片手に硬直していた。

「これ、どうやって食べるの」

そうやって缶詰を突き出すエルシエル、表情こそ殆ど変わらないがその明らかに困っていることが伺える可愛らしい動作にリタは微笑んだ。

リタはスカートをたくし上げ、太ももに巻かれたナイフケースからナイフを取り出すと、手首を返して刃に光を当ててる。

すると刃は綺麗な光を返す。多少錆びついている部分もあるが、缶詰を開ける分には充分だろう。

リタは受け取った缶詰を台に置き、ナイフを当てて言った。

「よく見ているのよ、食べ方を教えてあげるから」

からん、と空になった缶詰の音がした。

エルシエルが三つ目の缶詰を食べ終え、重ねた音だ。

その中身は桃の果実で、驚くべきことに腐っているどころか新鮮ですらあった。缶詰という技術は食品保存の観点において間違いない革命的な技術だ。

木箱の中の缶詰の山と睨めっこしながら缶詰を如何にして運ぶか考えていたリタは、その音でエルシエルが食べ終わったのを知り、振り返った。

「美味しかったかしら、エル？」

缶詰の表面に描かれていた桃の絵を見つめていたエルシエルは、顔をあげ、小さく頷く。

「うん、美味しかった」

「そう、良かったわ！」

無表情に頷くだけのエルシエルに対して、手を合わせて満面の笑みを浮かべるリタ。喜ぶべきはエルシエルな筈だが、リタの方が嬉しそうだ。

「ところでエル、持っていく缶詰を考えていたのだけど何か食べたいものはあるかしら」

「さっきの」

「そう、わかったわ」

エルシエルの要領書を受け、缶詰の山から桃の缶詰を取り出し、台に並べるリタ。

並べられているのは桃の缶詰だけではない、肉を加工した物もあれば、スープの類もある、リタは栄養が偏らない様を持っていく缶詰を吟味しているのだ。

「エル、一つ頼んでもいいかしら？」

「なに、リタ」

「この建物を探索して鮑を見つけて来て欲しいの、今の私達では大した量は持ち出せないわ」

「わかった」

「無かったら諦めて良いわ、くれぐれもこの建物から出ないようにね」

心配するリタの声を背に受けながら、エルシエルは厨房を後にした。

こつこつこつ、と硬い床を歩く音がする。

エルシエルは長く、色褪せた薄暗い廊下を歩いていった。

リタの言葉に従い鞆を探している最中だ。

その廊下には連続的に何本もの錆びた鉄棒で隔てられた個室があり、その個室の壁には採光用の小さな窓が開いている。

それは明らかに誰かを閉じ込める場所であり、幼いエルシエルにもその正体は容易にわかった。

「ここって、ろうごくかな」

エルシエルの予想は当たっていた。この建物は牢獄で、先程の厨房もその一部だったようだ。

塀が高かったのもそういう理由だろう、今となつては正面玄関が朽ち果ててしまつており塀の意味はとつくに無いのだが。

「ん……なんだろう、ここ」

エルシエルはふと、一つの房の前で足を止めた。

その房は明らかに他と違った異様な雰囲気いふくを放っていた。

おおまかな設備や見た目は他の房と同一なのだが、何故かこの房だけ罫具が追加されているのだ。

それは壁に堅く取り付けられた金具で、床を這う鎖で、何かを留めておくための拘束具だった。

この房にだけそれがあるのは何故なのだろうか、ここの房には他の収容者と違う誰かが収められていたのだろうか。

「……」

この房に興味を駆られたエルシエルは無言で瞳を閉じ、

開いた。

それを境に景色は様相ようそうを変える、色褪せた壁は往年の色を取り戻し、鉄格子に錆びは見らず、突っ張った拘束具はその役割を果たしている。

変わったのは景色だけではない、ただただ沈黙して光景を見つめるエルシエルの瞳にも変化が見られる。

虹彩こうさいの部分に妖しくあやも美しい神秘的な文様もんじょうが浮かんでいるのだ。

その瞳は特別な魔法使いの証、それは生まれ持った異端の力。

魔法使いは様々な事象に干渉できる存在であるが、全ての魔法使いがそうではない、まれに生まれつき狭い範囲の魔法しか使えない魔法使いが存在する。

エンデと呼称されるそういつた存在は、魔法の不自由と引き換えに特殊な魔法や体質を得る。

星空に呼応し強大な力を得る者、意思とは関係なく常に毒を生み出し続けてしまう者、属性様々だ。

そしてエルシエルもエンデの一人だった、身に宿った力は『場の過去を視る』魔法。

彼女が願えば、彼女は過去の世界を垣間見ることが出来る。

その力を発動し、彼女は知った。

牢に捉えられていたもの、

それは白翼はくよくだった。

本来であれば大空を自由に羽ばたくはずのそれは、狭い牢で窮屈そうに垂れている。

不相応な拘束具まで使って牢に繋がれていたのは、背中から白い翼を生やした灰色の髪の少女だったのだ。

採光用の窓から差し込む光に照らされた白翼の少女はあまりに美しく、あまりに悲しい顔をしていた。

「鳥の……おんなの子？」

エルシエルは青い髪を揺らして首を傾げた。白翼の少女は到底罪人とは思えなかったのだ。

体は無骨な拘束具と釣り合わないほど垂奢で、四肢は細々としており、悲しむ表情には少女の繊細な精神性が

覗いている。

この少女は獣人と人間の混血、いわゆる亜人種あじんとよばれる系統の人間だ。

あまね 遍く亜人種は人間より身体能力に優れ、空を飛べる者すら存在する。

だが、本来であればこの少女に拘束具は必要無い。この少女は鳥の形質を身に宿す亜人種でしかなく、飛行できざる事を除けば身体能力自体は同年代の人間の少女相応だ。

この拘束具は愚かな人間の無知か、恐怖か、そのどちらかの具現ぐげんなのであろう。

「エル、こんなところに居たのね」

臉を瞬かせつつ、廊下に響いた声に振り向くエルシエル。

瞬きを境に魔法が解除され、虹彩から文様が消え失せる。

「リタ」

かつかつとブーツを響かせながら姿を現したのは、リタだった。

「探したわ。なかなか帰ってこないから」

「白い翼 見てた」

「白い翼？」

エルシエルは言葉を返さず、その代わりに手を差し出した。

「視ろってことね」

リタがその手を取ると、エルシエルは再び魔法を発動。

虹彩に文様が浮かび、景色が在りし日の物へと変容する。

しかし今回は前回と相違があった。手を繋いだリタの作り物の虹彩にも文様が浮かんでいるのだ。

再びその姿を露にした白翼の少女が二人の瞳に映り、リタは得心がいったとばかりに頷いた。

「成程、この娘を視ていたのね」

エルシエルの魔法は手を繋ぐことで他人に共有出来るのだ。

今となつては、共有する相手は一人しかないのだが。

「うん」

「この娘……鳥類の亜人種にしては拘束具が多すぎるわね」

からん、鎖の音が鳴った。

悲しい表情で俯くばかりだった白翼の少女が身じろぎしたのだ。

今や顔は上げられ、床を彷徨っていた視線はエルシエル達へと向いている。

とはいえ遥かな過去からエルシエル達を認識したわけではない、エルシエル達がいた場所にかつて立っていた者を見ているのだ。

「君が……亜人……なのか……？」

声がした。

それは少女二人とは似ても似つかぬ声、爽やかな青年のような声だ。

事実それは二人の声では無い。二人の目と鼻の先に現れた牢番ろうばんの兵の幻影が発した声である。

エルシエルの魔法は過去を視通すだけではなく、彼女が望むのであれば過去の声を聞くことも出来るのだ。青年の牢番の問いに白翼の少女がこくりと頷いた、悲しく、寂しい目だ。

その肯定を受け、青年の牢番は呆然とした声を発した。その拳はきつく握られている。

「ああ……そんな。僕は、僕たちは、なんてことを……」

「……？」

狼狽する少年に、首を傾げ、怪訝けげんな表情をする白翼の少女。

青年は少女の所作に気づくことなく、苦々しい顔で走り去っていった。

その背中を黙って見届けたエルシエルは、首を傾げた。

「どうしたんだろう」

「エル、なんだか面白そうだし追いましょう」

「わかった」

エルシエルは小さく頷くと、瞳を二度瞬かせた。すると虹彩に浮かんた文様が消え失せる。

リタは魔法が解除されているのを確認してから、エルシエルの手を引いて歩きます。

牢が並ぶ場所を抜け、青年の幻影が曲がって行った通路に入る。

すると、施錠された鉄製の扉が二人を出迎えた。

見た目こそ重厚で突破できそうにないが、鍵は既に錆びついており、押せば簡単に開いた。

部屋の中には幾つもの打ち捨てられた机が乱雑に立ち並び、その上にはぼろぼろの紙や筆記用具が散乱していた。どうやらここは牢番の執務室だったようだ。

「エル、視て頂戴」（ちやうだい）

エルシエルは二度瞬き再び魔法を発動、荒れ果てた部屋はかつての姿を取り戻した。

打ち捨てられていた机は規則正しく並べられていて、その上には質素なテーブルクロス、書類はしっかりと纏められて机の上に置かれている。

そして椅子に座って机に向かう人物が一人。だがあの青年では無く、見た目は四十代くらいの濃い髭を生やした貫禄のある人物だ。

胸元には色とりどりの階級章がぶら下がっており、そこそこの地位があることが伺える。

ガンッ！ 部屋に突然乱暴な音が響く、過去の世界でドアが開かれたのだ。

びっくりしたのか肩を小さく震わせたエルシエルの横を先程の青年が通り過ぎる、その足取りは荒々しく感傷的だ。

「所長！ あの子が何をしましたって言うんですか！ 僕の妹と同じくらいですよ！？」

青年はあの少女の待遇を抗議しに来たらしい、呼び名から察するに髭の男はこの責任者であるようだ。

男は青年の言葉にこれ見よがしに溜息をつくと、ぞんざいに返事を返す。

「お前のような偽善に駆られた新人は同じことを言うんだ。年齢も性別も関係ない、お前もこの国の人間であればしきたりは知っているだろう」

にべなく抗議を切り捨てる所長、青年は悔しそうに歯を食いしばる。

「……知っています」

「言ってみろ」

「……っ、亜人種と関わってはならない、彼らはこの国を滅ぼすだろう」

「わかってるじゃないか、亜人種はどうあれ悪なんだ」

「でも、だからって！ ただ迷い込んだだけの少女をこうやって監禁するなんてやり過ぎですよ！」

少年は机に手を叩きつけ、唾を飛ばし、感情的に声を荒げる。

だが所長は怯む事無く、面倒くさそうに椅子に体を預けて答える。

「監禁？ 人聞きの悪い。国の法に乗っ取って逮捕しただけだ」

青年は何か言いたげに拳を震わせると、業を煮やしたように部屋を飛び出した。

エルシエル達がそれを追うと、青年は再び少女の牢の前で佇んでいた。

しかし先刻とは違い、青年は少女に向かって頭を垂れていた。

少女は青年の動作の意図が掴めず、困惑した様子を見せている。

少年は少女の困惑など気づかない様子で、体を震わせその身を押し潰さんとする後悔を吐き出す。

「ごめんなさい、君にこんな仕打ちをするなんてこの国は間違っている。この国の一員として謝らせてください」

鬼気迫った表情で口にしたのは謝罪。少女はやっと気づく、この青年は自分の待遇を嘆いてくれているのだと。

少女は息を呑んだ。理不尽な仕打ちに心を痛めてくれる人間にいつぞ会ったことが無かったのだろう。

「なんて謝罪をすればいいか……僕はこんな酷い事が現実^{じゆつ}に起きているなんて思いもしてなかった」

自らの事かのように苦しげに言葉を紡ぐ青年。そんな真摯^{しんし}な態度に心を動かされた少女は久方ぶりに口を開いた。

「……顔をあげて、悪いのはあなたじゃないよ」

侮蔑^{がべつ}を覚悟していた青年にとつては予期しない言葉、彼は泣きそうな顔をあげ、自らと彼女を隔^{へだ}てる牢に縋^{すが}りつく。

「僕は馬鹿^{ばか}だった！ 兵役で牢番になったとき一目君を見てやろうと思つてた、国を滅ぼすだなんて亜人はどんな化け物なんだろうって！ でも、でも、君は化け物なんかじゃなかった！ 君のような可憐な女の子が化け物のわけがないんだ！ なのに、僕は伝承を信じ込んで亜人^{きみたち}を化け物だと思つていた！」

悔しさか、罪の意識か、穢^{けが}れを知らぬ青年の瞳から涙が零れ、頬を伝う。

これが高貴な涙なら美談として価値を持つが、無力な青年の涙に価値は無い。

それは世界に一滴たりとも影響を及ぼさず、彼の自^{みづか}満足に終わる定め。

けれどもそれは間違ひなく彼女の心に波紋を作り、数年ぶりに彼女の笑顔を呼び覚ましていた。

「いいの、いいんだよ、気づいてくれたなら。私はそれだけで満足だから」

しかしそれは薄い笑顔、彼女の心の底の諦観を拭えたわけではない。彼女が欲しいのは自由であり、謝罪ではないからだ。

とはいえ彼女だって理解している、自分の解放は簡単では無いと。

だから謝罪だけでも彼女は歓喜し、赦した。

「よくない、よくないよ……!!」

だが青年は諦めなかった、理不尽な境遇に置かれた他人に涙出来るような愚かさを持っていた彼は、知ってしまつた不条理から目を背けるような事は出来なかった。

彼は彼女を見据え、決意を瞳に秘め、拳を握り、理想を叫んだ。

「待っていて、僕は必ず君を助けるから！ 君は僕を許してくれた、なら僕は君を救う！ 今は無理でも、いつか必ず！」

彼の誓うと同時に過去の世界は泡沫と消え、現代の廢墟がその姿を取り戻した。

エルシエルの魔法は不安定だ、暫く発動していると勝手に消えてしまうこともままあった。だがリタは十分に楽しめたらしく、熱っぽく口を開く。

「惚れてるわね、彼。あんなにかっこいいことを言ってしまうんだもの」

リタは恋する乙女の如く頬に手を当て、甘く蕩けた表情を浮かべる。普段の凛々しさはどこへやらだ。

「そうなの？ よくわからない」

「ふふ、エルにはまだ早いかもしれないわね」

くすくすと笑うリタ、エルシエルは興味なさげに尋ねる。

「まだ、視るの？」

「もちろんだわ、もしかしたらもつと良い場面があるかもしれないもの！ キスとか！」

人形という存在の性な^{さが}のかりタは愛され、大事にされることを強く求めている。

だからこそエルシエルと一緒に居るのだが、その特性は彼女の行動や趣味嗜好にも出ており、こういった愛の

匂いを孕んだ物をリタは求めて止まなかった。

エルシエルは再び魔法を発動、風景がかつての物に塗り替わる。

再び視えた過去の牢には多少の変化が生じていた。牢に囚われ俯く白翼の少女の背丈が少し大きくなっているのだ、先ほど視た過去より少し時代が進んだのだろう。

かつ、かつ、かつ、硬い足音と共に誰かが牢の前に現れた。

少女は牢の前で止まった靴音に気づき、嬉しそうに顔をあげた。誰が来たのか把握しているようだ。

やはりというかそれはあの時の青年だった、しかしもう青年と呼べるような見た目では無い。

背は見違えるほど伸び、体格も良くなり、上等な軍服に幾つもの階級章をつけている、その総数はあの部屋で所長と呼ばれていた人間より多い。

顔も例外ではない、青年だった頃の面影は色濃く残っているものの、より男らしい顔つきになっている。

だが一番変わったのは瞳だった、かつてのような純粋な瞳ではなく、地獄の罪人のような光の失せた瞳だった。

彼は片手にサーシャという名の刻まれた軍服と軍帽を抱え、ベルトには鍵を携えていた。

「サーシャ、君に招集命令しょうしゅうめいが出ています。これを受諾する場合、君は直ちに王に仕える軍人となり恩赦おんしやによって釈放される。これは第三級命令である、拒否も可能だ」

サーシャと呼ばれた白翼の少女は、その言葉で笑顔を失う。あるのは悲しみの色のみだ。

彼は泣きそうな表情でサーシャの穢れ無き白翼を見つめ、言い訳のように軍規の一つを口にした。

「新部隊の設立時、その隊の隊長の要請であれば罪人の召集しょうしゅうも許可される——俺は戦争で幾つもの戦果をあげて部隊を率いる立場まで登った。けれど今の俺の力でも君を救う手段はこれしか無かったんだ。所属部隊は第三聖剣部隊、敵軍に強襲をかけ切り込む部隊——言ってしまうはこの戦争の劣勢を押し返すための使い捨て部隊だ」

血が滲むほどに拳を握り、彼は悔しそうに語る。

少女は遂に涙を流し始め、嗚咽を漏らすばかりで何も答えない。

「頼む、受けてくれ。サーシャ。戦いに参加すればきつと君の美しい翼を血で穢してしまうことになるだろう、そしてそれは君の血かもしれない……でも、この手しか無かったんだ」

彼としてもこんな形で解放するのは本意では無いのだ、握り込んだ拳から血が伝い、軍服の袖を濡らす。

しかしどんな言葉で取り繕おうとサーシャの涙は止まらない、それもそうだろう、不当な扱いから解放されど死と隣合わせの場所に放り込まれるのだから。

安全の保障されない自由か、自由の保証されない安全、果たしてどちらが幸せなのだろうか。

「サーシャ、泣かないでくれ、君が自由を望むなら俺が全力で守るから……俺は、君を守る為だったら命だって払ってみせるって決めたんだ」

懺悔ざんげのように紡がれる彼の言葉に、やっとサーシャは顔をあげた。

言葉の内容に救いを見出したのではない、むしろ、逆だった。

「違う……違うよ……私が泣いているのは怖いからではないよ」

「では、なぜ……」

「私が泣くのは、あなたが辛そうだからだよ」

予期せぬサーシャの言葉に、彼は困惑を浮かべて、佇む。

「俺……が？ 君に比べたら、俺なんて……」

「じゃあなんで血が滲むほど拳を握るの？ それに、あなたはそんな目をする人じゃなかった」

彼は自分の手を見て震えた、手が血濡れになっていることに今更気づいたからだ。

得てして人は、遠くを見過ぎていると手元が見えなくなってしまう物なのだ。

「……」

サーシャは拘束具をガラガラと鳴らしながら、自分の手を彼の手へと力の限り伸ばした。

「私はその召集を喜んで受けるよ。あなた隣で、その痛みを拭きたい」

そこで過去の幻影は途絶えた、とはいえ見たいものは殆ど見られただろう。

リタは夢見ごごちな表情で息を吐く、この上なく幸せそうな笑顔だ。

「ああ、とっても楽しかったわ！」

「満足した？」

その問いに対し、リタは笑顔を浮かべて当然とばかりに答えた。

「いいえ、全然！ 続きを探しに行きましょう！」

「……ここには無いの？」

「多分もう無いと思うわ、だって戦争に行つてそうなもの」

「じゃあどこに？」

リタは興味なさげなエルシエルの手を掴み、満面の笑みを浮かべた。

「わからないわ、けれど探すのも面白いじゃない！」

そんなやり取りを経て、やって来たのは結婚式場の廃墟だった。

あの時から時間がだいぶ経ってしまい、すっかり夜更けになっていた。

「もう夜になったよ」

「大丈夫、私の読みだどここに来てるはずよ。彼女達は戦争の中で愛を育んで結婚しているのだわ！……多分」
幾つもの廃墟を巡ったが、どこにも彼らの物語の続きは無かった。

それでも諦めないリタに対しさしものエルシエルも嫌そうな表情をしていたが、リタはこの結婚式場を指し「きつとあそこよ！　ここで最後だから！」とエルシエルを半強制的に付き合わせていた

結婚式場は廃墟にしては綺麗だった、少し高い場所にある夫婦が座る高砂席も、参列者が座る椅子や机も、果てはカーテンすらも、当時の姿を保ったまま廃墟と化していた。

廃墟らしい点を列挙しても至る所に張られた蜘蛛の巣や、埃が積もっていることくらいだろう。

「ほらほら、早く視て頂戴」

エルシエルはリタに急かされ、手を繋いでから魔法を発動。

その瞬間、結婚式場の入り口に立っていた二人は過去を垣間見る。

魔法を発動した途端に沸き上がる雑音、咳払いに、衣擦れ、靴が床を踏む音

見れば多くの人間が正装で席に座っている。

いや、人間だけでは無かった、半数ほど亜人種も混じっている。

壁という壁には豪華な装飾が施され、賑やかしの為に用意されたのであろうオーナメントや色とりどりの花びらが魔法で宙を泳ぐ。

高砂席にはタキシードを着た男性と、ウエディングドレスを着た女性。

それはあの時の青年と白翼の少女、彼女の翼は心地よさそうに広げられている。

二人の姿を視て、リタは歓喜の声をあげた。

「ほら、やっぱりいたじゃない！」

高砂席の奥から現れたのは豪華な服装で王冠を被った^{かっぶく}恰幅の良い男性。身なりから推察するにこの国の王であるろう。

王は二人の夫婦の後ろに立つと、国民全てに宣言するように大きく声を張り上げた。

「皆の者、今日のはめでたき日だ！ 我らが英雄たちの結婚式なのだから！ これほどまでに素晴らしき日がある

だろうか！」

沸き上がる歓声、人間も亜人も分け隔てなく喜びを口に出している。

王は彼らの言葉に応えるように、更に堂々と声を張り上げる。

「彼らは聖剣部隊として戦争の趨勢すうせいを変える程の活躍をし、我らが祖国を救ったばかりか、その絆によって亜人への謂れのない差別を払拭した！」

王が語るのは彼らの来歴、エルシエルが視た過去の断片から推測するにきつと彼らはあの後多大な戦功をあげ、英雄と称えられ、亜人と人間の活躍は文化にも影響を及ぼしたのだろう。

「そうして今迎えるは亜人と人間が手を取り合う奇跡！ 呼びかけに応じてくれた近隣の亜人たちよ！ 今まで事はどうか赦してくれまいか！」

王の問いかけに各所から挙がる承認の声。綺麗な同調だが、それぞれ言葉が違い事前に仕込まれた物のようには聞こえない、きつと彼らが心の底から思った事に違いない。

「ありがとう！ 亜人と人間が手を取り合えば、きつとこの国はどこまでも発展できるだろう！」

王の締め言葉が響くと同時に、会場全体が沸き上がった。

ただただ融和を喜ぶ言葉と共に、人間が巫人と握手し、巫人と人間が抱き合う。

平和に満ちた空間だった、戦争は終わり、巫人への弾圧は融和という結末を迎えた。

そして、なによりもその結末を喜んでいたのは高砂席に座る新郎新婦だった。

少し高くなっているそこから会場を見下ろし、新郎は新婦に向かって囁いた。

「

歓声にかき消されてエルシエル達には何も聞こえない、けれど、知る必要もないだろう。

新郎に何かを囁かれた新婦は、感極まった表情を浮かべ、涙を溢した。

」

そして新婦がお返しとばかりに新郎に何かを囁くと、新郎の頬を涙が伝った。

二人は涙を流したまま会場を一瞥し、笑い合う。

何を想うのだろうか、平和、融和、それとも、互いの事であろうか。

会場は誰も新郎新婦に注意を向けない、次の司会進行が入るまでは現状を祝うのに忙しいだろう。

ないがし

蔑ろにされているのに関わらず、新郎新婦はそれを見て微笑むばかり。彼らにとってはこの光景こそが幸せなのだろう。

ふと、向き合う二人。

角度故にエルシエル達からは表情は伺えない。

そして、国を救った新郎と、白翼を広げた新婦は、

唇を重ねた。

そんな幸せに満ちた美しき光景を目にしながら、エルシエルは呟いた。

「それで——」

魔法は切れた。亜人も人間も一緒くたに魔力の青い残光と化し、花びら舞う絢爛豪華な結婚式は脳裏にあるば

けんらんじゅうか

のうり

かり。

残るは人の居なくなつたただの箱、虚ろになつた結婚式場、廃墟となつたこの場に満ちるのは幸せではなく、諦観と虚無のみだ。

今や讀える物を失い、植物が繁茂するばかりの高砂席を見て、エルシエルは言つた。

「なんで滅んじやつたんだらうね」

エルシエルが口にしたのは素朴な疑問。

この国は間違ひなく順風満帆じゅんぷうまんぱんだつたはずだ、敵国を退け、英雄が誕生し、亜人と和解できていたのだから。なのに、なぜ滅んでしまつたのだらうか。

「そんなことどうでもいいじゃない！ それよりあの二人の新婚生活が気になるわ、きっと五秒に一回は愛を囁いているわよ！ ああ、新婚旅行はどんなところかしら、家庭ではどんな料理を作るのかしら、二人はどんな子供を育てるのかしら、妄想が膨らむわ！」

二人の未来を妄想し、熱く語るリタ。

愛を求めるその性格故か、彼女は他人の恋愛事に興味津々で、琴線に触れるような事象を見つけたところやつて喧しくなるのだ。やかま

人形の冷たい肌は無感情を想起させるが、彼女はそういった言葉とは縁はないだろう、むしろエルシエルの方がよほど似合う。

興味なさげにぼうつとするエルシエルと、誰に聞かせるでもなく喚き続けるリタ。

なんともちぐはぐな二人に向かって、ひゅう、と式場の割れた窓から風が吹き込んだ。

「きゃっ！」

エルシエルの青髪が踊り、リタの黒髪とドレスのスカートが膨らむ。

その風に流されどこからかやって来たぼろぼろの紙束がリタの汚れたブーツに張り付いた。

「何かしら、これ」

リタはそれを拾い上げ、広げる。

それは新聞紙だった、この国が減ぶ前に発行されたものだろう。

その記事をしげしげと見たリタは、一言。

「……エル。この国が減んだ理由、わかったわよ」

「そう」

リタが手に持つ記事を覗き込むエルシエル。けれど新聞に使われるような堅い文章は難しかったようで首を傾げるばかり。

エルシエルは年齢にしては文字を読める方なのだが、やはり難解になりやすい新聞の文章は難しいのだろう。

「エル、あなたにはまだ難しいわよ。でも……そんなあなたも可愛いわ」

リタはくすくすと笑って、新聞紙の内容を読み上げる。

ある程度の文字しか読めないエルシエルと違って、リタは平均的な文章を読めるだけの知識があるのだ。

「エル、記事を読み上げるわね。——警備的な活躍で我々が祖国を悪辣な隣国から救った第三聖剣部隊の隊長と亜人の副隊長、彼らはその功績によって英雄と称えられ、亜人種への扱いを見直させる切っ掛けを作った。

我々は古来より伝承に従って亜人を拒絶し、悪としてきた。しかし、こうやって再考の機会を得てみるとおかし

い物に思えた、拒絶する明確な根拠はなく、彼らは悪などでは無かったのだから。本当に悪なのであれば亜人が我らの祖国を救った事に説明がつかない。だから彼の隊長が亜人の迎え入れと共生を提案した時、我々は諸手をあげて賛同した。そうして異種族と、その文化と融和した我々は一時は繁栄を謳歌した。だが、我々は浅はかだった、根拠なしと思われた伝承には根拠が無かったのではなく、長い時代の間で伝承から抜け落ちてしまっただけだったのだ。その抜け落ちた根拠は、遙か昔にこの国の人間の三割を死滅させた大疫病にある。あの疫病がどこから来た物なのか今まで不明とされていたのだが、最近の研究ではつきりとした、あれを持ち込んだのは亜人だったのだ。当時の人間達は亜人が持ち込んだのだと見抜き、今後亜人と関わらないように伝承を残していた。しかし我々は伝承の一番重要な部分を忘れ形骸化した伝承を批判し、こともあろうに亜人と大規模な融和を図った。その結果が今の惨状だ、この国は再び疫病に苛まれ現時点で国民の四割が死に至った、彼の英雄も王も病床に伏し、なおも止まる心配はない。更に追い打ちをかけるようにあの疫病は姿を変えた、本来であれば亜人は症状を発症する事はないにも関わらず、今回の疫病は亜人すらも発症し、融和路線で迎え入れた亜人の半数は既に倒れた。医療協会が対応策を実施すると発表しているが、果たしてどうなるのであろうか——だ、そうだ

わ。……どう、わかったかしら」

一息に読み上げたリタは、エルシエルへと向き直り、目をばちくりとさせた。

「……エル、なにしているの」

「つかれた」

エルシエルは埃積もる式場の床に横になっていた。おかげで長い髪は埃だらけでぐしゃぐしゃだ。

「なんでこう、あなたは時々突拍子の無い事をするのかしら……そんなところに寝転んではだめよ、埃だらけになっちゃってしまっわ。ちょっと待っていなさい」

リタは肩を竦めて新聞を置き、周辺の散策へ乗り出す。

参加者の席、舞台裏、どこも埃っぽく清潔では無い。

式場は全体としてみれば綺麗な廃墟ではあったが、どこまで行っても廃墟でしかない、清潔とはとても言い難い場所なのだ。

リタは散策を続けるうちに植物が繁茂する高砂席の床にテーブルクロスが転がっているのを発見した。

「これなら……」

埃が堆積したそれを静かに捲ると、予想通りに綺麗な床が現れた。

リタは満足そうに頷くと、手招きと共にエルシエルを呼ぶ。

「エル、こっちに来なさい」

面倒くさいのか若干不服そうにしながら起き上がり、高砂席に昇りリタの傍に座り込むエルシエル。

「もう、こんな汚れちゃってるじゃない。ほら、背中向けて」

「……ん」

リタはエルシエルの服についた埃を払い、髪の毛に絡んだ埃を手櫛で落としていく。

「まったく、手がかかるんだから」

文句を口している割には、零れんばかりの笑みを浮かべており、世話を焼ける事が楽しくて仕方がないようだ。

「……エル、かわいいわ。好きよ」

髪に手をやり、埃を取り除いてる彼女の表情は、美しい物を尊ぶかのようなものだ。

「もう大丈夫、終わったわ」

「……んう」

リタは床にスカートを花開かせるように優雅な動作で座り、正座の体勢をとると、自分の膝を叩いた。

「エル、膝を貸してあげる。ここでも横になっていいわ」

「わかった」

エルシエルは言われた通りに綺麗な床に寝転び、リタの膝に頭を乗せる。

それから、無表情で呟いた。

「かたい」

リタはエルシエルの言に、はっとして悲しそうな表情をした。

「……そうよね、人形の膝だものね。初めてだから、知らなかったわ」

リタはエルシエルに出会うまで今まで誰にも膝を貸したことが無かった、愛されたことも、愛したことも無か

ったからだ。

ただ人間の愛を羨ましがり、愛されたり愛することに恋焦がれるばかりだった。

だから彼女にはわからなかったのだ、人間の愛情表現が人間の物であることに。

彼女は人形でありながら心を持ち、自由意志で動くことが出来る、姿形や声も人間そっくりだ。

しかし、そっくりどまりなのだ。

肌は硬く、顔色は変わらず、命の灯火すら宿さない。

まるで、風貌はそっくりなのに持つべき機能を失いきってしまった廃墟のようだ。

リタはそれを自覚し、膝枕をやめようとした、だが。

「でも、好き……かも」

エルシエルの思わぬ言葉、リタの顔は綻んだ。

「……曖昧ね。けど嬉しいわ」

リタは微笑み、エルシエルを見下ろした。エルシエルもリタを見返す。

エルシエルは不思議そうな表情で、リタはこれ以上ないくらいの幸せな表情で、しばらく見つめ合い、リタは口を開いた。

「……それで、この国が減んだ原因なのだけど。この国の人たちは、現状を変えたくて努力して、そして実際に現状を変えた。けどその変化が原因で国が減ってしまったの」

リタの説明した概略を聞き、エルシエルは呟いた。

「……じゃあ、その人の努力は無意味だったんだ」

その表情はいつもと変わらず無表情であったが、声の響きはどことなく寂しそうにも聞こえる。

「私はそうは思わないわ、あの人の努力に意味はあったわよ、そのおかげでエルがお腹いっぱいになれたじゃない」

彼らにとっては良い結果ではないとはいえ、彼らの行動のお陰でこの国は滅び、そして滅んだからこそエルシエルが立ち入ることが出来、彼女はお腹を満たせた。

きっと、そこに意味はあったのだろう。

「そういうものかな」

「そういうものよ」

リタは難しそうな表情をするエルシエルを愛おし気に撫でながら、話題を変える。

「エル、気になった事があるのだけれど」

「なに」

「あなた、缶詰は過去を視て見つけたのだろっけれど、よくあれが食べ物だってわかったわね？ 開け方も分かんなかったくらいなのに」

「あの箱、運んでた人達が味の話してた。だから食べ物になって」

「なあんだ、そんなことだったのね」

聞いてみれば単純明快な理由にリタが肩を竦め、つられて思い出したことを口にする。

「そういえば結局、缶詰は回収してないわね」

「うん」

「じゃあ明日は鞆の入手と缶詰の回収ね、あと何かしたい事あるかしら？」

「べつに」

エルシエルの無関心な言葉にリタが苦笑すると、エルシエルが大きな欠伸をした。

見ればエルシエルの^{まぶた}瞼は下がって来ており、うつらうつらとした表情をしていた。

「エル、眠くなってしまったの？」

リタの問いかけにエルシエルはこくりと頷く、年相応な可愛らしい動作だ。

「こうやってると、なんか心地いい」

「エル、あなたは私をお母さんとも思ってるのかしら？」

くすくすと笑って冗談を口にするリタ、妙に上機嫌なのは思わぬ言動に嬉しくなったからだろう。

「……わからない。ふわふわって、ほわほわってしてる」

彼女は不定定も肯定もしない、ただ眠そうな表情で曖昧な表現を返すだけだ。

人との関わり合いが薄かった彼女にとって、リタに対して覚えている感情を形容するのは難しいのだろう。

漫然としたエルシエルの言葉に、リタのまつ毛が揺れ、髪がふわりと膨らむ。リタは動揺したのだ。

「あなた、それって……」

疑惑の色を孕んだ声。しかし答える声はなく、それは廃墟に寂しく反響した。

「エル……う？」

気づけばエルシエルは夢の世界へと墮ちていた、一言の返答すら無かったのも道理である。

警戒心の欠片すらない表情ですうすうと寝息を立てるエルシエルを見て、リタは諦観交じりに呟いた。

「……まさか、とは思うけれど」

その声は誰にも聞かれる事無く、廃墟に虚しく消えていった。

割れた窓から月光が照らしていた、二人の少女を。

あどけない表情で眠る青髪の少女を、その青髪を優しく撫でる黒髪の人形を。

廃墟の式場で、愛を誓う者達の台に在る二人を。

虚ろになった箱に咲く二人だけの世界、純白のヴェール代りの月光。

それは言葉にし難いほど美しく、神聖で、そして、寂しい風景だった。

